

巻頭言

信州大学附属図書館長
東城 幸治

「信州大学附属図書館研究」第11号をお届け致します。石井鶴三や北杜夫に関する論考に加え、附属図書館の多様な取組に関する報告も含む全11報文で構成されています。新型コロナ（COVID-19）感染症の世界的蔓延により、図書館業務も大きな影響を受け、この2年間は多くの制約の中での運営が余儀なくされてきました。このような中でも、本号を予定通りに刊行できますことに安堵するとともに関係する皆様に感謝申し上げます。

私は、本号編集のほぼ最終段階であった昨年10月に館長に就任しました。学術情報や大学史資料の整備・利活用を通し、信州大学の教育・研究活動の活性化、そして地域との連携強化に向けて励んで参りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

四半世紀ほど前、ある大学教授は、大学における図書館と博物館を「車の両輪」に喩えました。いずれも、大学が発展する上で重要な機能を担う機関ですので、とても分かりやすい喩えでした。しかしその後、大学そのものも、大学図書館が置かれる状況も激変しました。国公立大学は独立法人化され、書籍や学術誌の電子化も大きく進みました。論文や書籍がパソコンやスマートフォンの画面上で読まれるようになり、授業や会議のオンライン化も進みました。当然ながら、大学図書館に求められる役割も大きく変容しました。教員の研究成果を収録・公開する「SOAR」や、公的研究資金の支援を受けた研究成果の公開に対応する「機関リポジトリ」の管理・運用において、図書館は既に大きな役割を担っています。さらに、研究データそのものの管理・運用における指針（データ・ポリシー）策定においても中心的な役割が期待され、デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進は、研究のみならず教育面での利活用も含めて今後より一層の加速化が予想されます。つまり、大学図書館が担うべき役割は「車の両輪」どころか「エンジン」そのものとなりつつあり、その制御においても主体的な関与が期待されています。特に、本学の附属図書館は「大学史資料センター」という博物館的機能をも包含する組織であり、大学運営における重要かつ中心的な機能を担う存在です。

また、本学の附属図書館においても地域との連携の重要性は益々高まりつつあります。全国に先駆けて、長野県内の博物館・美術館・図書館等の文化施設とのMLA連携（Museum, Library, Archives）として、既に「信州 知の連携フォーラム」を発足させております。本号では、このフォーラムに関する報告記事や、MLA連携に基づく図書館職員の交流研修に関する紹介記事も掲載しております。加えて、学修支援の取組や大学史資料センターの企画展に関する報告記事も掲載しております。これらの大学図書館における多様な活動にご理解を頂きながら、皆様とともに、本誌発刊時からの課題である「いかにしたら快適な大学図書館となれるのか」、「大学図書館にしかできないこと」、「そして大学図書館が目指すべき将来像」を探求して参りますので、今後ともご支援を宜しくお願い致します。

令和4年1月